栂尾山高山寺の国宝石水院。
廂の間には善財童子像が。

紅葉がいまいちだった当日は３人の船頭さんだが、
事故の時は水位が高く４人体制だった。

右の写真の階段を登ると、
ご褒美は紅葉の神護寺。

戦乱の世には山城だった。
脚がパンパンなのにまた階段！

保津川下りでは山陰本線とトロッコ鉄道合わせて６つの鉄橋をくぐる。

暮らす旅 京都
疲れを癒すもみじかな

文・写真／松岡伸吾（暮らす旅舎）

話術も巧みな３人の船頭さんが代わるがわる舵を取り、漕ぎ、長竿を操る。その昔、木材などの物資の水運に始まった保津川下りも、今では急流や景色を楽しむ船遊び。16キロの行程も飽きることはない。

思い起こせば、春にはコロナもおさまり、猛暑のなか復活した祇園祭では、四条烏丸は人の頭で埋まった。そして遅い秋。京都は想像を超える観光客で溢れかえった。繁華街ではさまざまな外国語が飛び交い、4年前の記憶を彷彿させ、市バスも乗れないほどの賑わいが戻った。

足を伸ばしたのは紅葉の嵐山。実は、5月に京都の友人と約束していた保津川下りが、悲しい人身事故のために中止に。その後いろんな安全対策を備えて再開できた。

ところが朝10時過ぎに嵯峨嵐山駅に行くと、トロッコ列車は夕方まで満席売り切れだった。当然トロッコと保津川下りはセットと思っていたがそうではない。実はJRで嵯峨嵐山駅から亀岡駅へ行く手があった。乗船券も買って亀岡駅で降りると、目の前に聳えるサンガスタジアムを回り込んで、乗船場まで10分で歩ける。半分は海外客でいっぱいの待合室で係の人に聞くと、1隻20人乗りで所要時間は約2時間。トラックでまとめて運んできた船をクレーンで吊り下ろす作業を眺めて順番を待つ。救命胴衣をつけて乗船券の番号順に席に着くと出航した。

船頭さんの吉本も顔負けの掛け合いを楽しみつつ、鉄橋を渡る列車や、さまざまな形の巨岩や奇岩を眺め、ときにはしぶきを浴びて急流を下る。川には亀や鴨、岸辺にはイノシシの子供まで登場した、この日は水量も少なめで安全航行。到着の20分前には売店船も横付けされ、ビールとつまみが飛ぶように売れていた。

翌日さらに紅葉を求めて出かけたのは、高雄の三尾。高雄（尾）山の神護寺、槙尾山の西明寺、栂尾山の高山寺の3つの山に「尾」があることから、「三尾」と呼ばれる。バスの終点にある鳥獣絵巻で有名な高山寺から巡った。最後の神護寺は、清滝川にかかる高雄橋から参道が続く。苦行そのものの長い登りも紅葉の見事さに癒された。